かぜのわ

平成15年1月30日発行
第20号
社会福祉法人　水仙福祉会
〒533-0044 東淀川区小松1丁目14-12
Tel 06-6328-3786　Fax 06-6328-3833
題字　岡村　重夫

巻頭言

社会福祉の先駆者・開拓者から学ぶとき

社会福祉法人 水仙福祉会　常務理事　松村　寛

昨今、社会福祉施設関係者の嘆き節を聞くことが多くなった。口を開けば「厳しい！」とつぶやく。確かに社会福祉の基礎構造改革がすすみ、公的支援が後退し、様々な形で市場の競争原理が福祉の世界にも導入されてきていることから、これまでと違って施設運営に神経を費やすようになった。また社会の不況がどん底にあるので、福祉施設もその影響を受けてやりくり算段せざるを得ないのは事実だろう。

◆

しかし一方、施設利用者の方たちも困窮している人たちが増えてきているのである。リストラによる失業、商売不振、給与のダウン等々である。こうした要因が家庭内のバランスを崩し、離婚や家庭崩壊にも繋がっていく。そして福祉に対する様々なニーズが発生する。

◆

わが国の福祉施設の発達を振り返ると、不幸な時代の中にこそ施設が作られ活躍した。例をあげれば、明治38年の東北地方の大飢饉のとき1200人の孤児を収容した岡山孤児院の石井十次をはじめ、大正7年の米騒動の折のセツルメント施設、北市民館の設置と志賀支那人の活躍、濃尾地震による被害者支援の一環として知的障害児施設滝乃川学園を創立した石井亮一、太平洋戦争の戦災孤児を収容保護した数多くの養護施設を開始した人たち、等々枚挙に暇がないほどである。

公的支援のないこの時代に、私財を投げ打って弱者救済に奔走した人たちのこのエネルギーは、すべてセツルメントの理念からくる情熱である。

◆

こうした社会福祉の先駆者たちの艱難辛苦を考えると、今の私たちの状況は比較にならない程である。愚痴を言って嘆くどころか、こんな時代だからこそ福祉施設関係者の出番であり、利用者の最善のために腹を据えてがんばっていかねばと思う。そのために、いま一度セツルメント精神の原点に立ち返ることがとても重要である。

■1月3日　法人主催の餅つき大会